

の際一般的な問題状況は何かということ、この会では具体的に何にしぼってやるかということをはっきり区別して考えると良いと思われる。また、できれば研究方法について必要に応じて指導助言できる体制があってもよいのではないかと思われる。研修所に提出するレポートや議事要旨について、内容や時機に応じて助言することは「自主性の尊重」に反するかもしれないが、あまり面識のなかった人たちが、未知の物事に対して組織を作って研究を行うというのはやはり大変なことなので、適宜なアドバイスは必要だと思われる。私たちの場合特定の人にかなり研究や資料集取の点で負担をかけたかたちになってしまった。レポートの作成、資料収集、報告書の作成などは役割分担を明確にするとともに、交代性などによって片寄りのないものにするほうがよいのは当然のことなのだが、構成員の仕事の関係や各自の研究の進捗状況に因ってなかなか計画どおりいかないケースが多いので、日程や分担について余裕を持った割り振りが必要だと思われる。資料収集、特に行政資料については内容によって協力を得られない場合もあったが、たまたま収集相手が知り合いのため現場の生の声を聞くことができた場合もある。全般的には、収集について非協力的という以前に、資料が未整理のた

め、何がどこにあるのかわからないというケースが多く、本市の行政情報の管理について考えさせられた。また地区カールの関係では東京の先進区を調査したのだが、活動費の使途が図書費等に限定されているので交通費としても使えるよう弾力的なものにしてほしいと思われる。

### 自主研究の成果

こうして一年かけて結局は未完成に終わった私達の研究が行政の現場へ生かされるかどうかを考えてみると「直接生かす」という点については相当難しいと思う。特に私たちのテーマは、市役所全体の機構の問題や予算編成のあり方など非常に重大な事項であるのでなおさらだと思われる。しかし間接的には、研究成果を『調査季報』等で発表し、それを読んだ職員が現実の仕事の中で一部を生かしていくという方法は可能だと思われる。しかしながらこうした研究を経験したということとはなによりその本人にとって良い効果を生じていると思われる。現在仕事も当時とは構成員のほとんどが変わっており、その中の一人は「研究成果についてメンバーが自分の職務を行ううえで役だてることは大いに期待できる。実際私もこの研究をやっていた当時は区役所にいたため『住民ニーズの把握』はともかくとして、予算などの『意思決定機構

の合理化』については一般論、抽象論としてしか理解できなかった。しかし今のポジションに配転してみて、具体的な施策課題の中に、この考えを生かす必要を感じている」と話しており、また別の一人は研究の成果について「さまざまな職場の人と知りあえたことは大変プラスになった。研究成果といってもレポートなどの成果物として表われるのはほんの一部であり、各人の発想の転換という目に見えない形で表われるものが大きいと思う」と言っている。

一般応募の自主研究の場合、未知の人

## 地区センター調査の五年間

北内陽子

### 成長期

「地区センター調査グループ」実はこの名はとても新しい。何年も続けて調査と分析を行ってきた私たちが報告書をまとめる時になって「結局、地区センターのことだけしかやらなかったのだから」ということで、急拠決定したのである。昭和五十二年に横浜市に入った人たちの中の有志が「都市問題を考える会」をつくったのが、グループのそもそもの始まりである。翌五十三年入庁の私たちはこの先輩グループの呼びかけで「都市問題研究会」なるものをつくった。都市問

たちとのふれ合いの場として別な面で大きな効果をあげていると思われる。いずれにしても私達の研究は中途半端に終わってしまったが、いずれ機会があれば今度は一般公募でない真の自主研究として私達のテーマを完成させたいと考えている。

魚谷憲治(総務局人事課)・新井貴(経済局貿易観光課)・斉藤恒樹(緑区役所固定資産税課)・小山正剛(戸塚区役所本郷支所税務課)・丸山由利子(企画財政局婦人問題担当)・金子延康(都市計画局調査課)・伊藤勇(総務局人事課)

題やまちづくりに関心をもっていた人たちが集まって、当面は知識を増やすことを目標に、関係する本を読んだりしていた。

当時、メンバーのほとんどは区役所の窓口で配属されていて、市民と身近に接することができたが、市政の進行とは直接関係がなさそうな業務に追われていた。自主研究に取り組むことで、日常業務から離れ、自治体が抱える問題の解決に自分たちも参加するんだ、という意気込みがあったと思う。

この会が成立して一年後、特定のテ

マについてじっくり考えてみようということになった。一般論ではなく、全国第二の都市ヨコハマを前に据え或る角度から切り込んで、そのヨコハマの職員である私たちの役割をさぐりたかった。いくつかの候補の中から決まったのが戸塚・本郷地区センター利用者意識調査である。

地区センターとは、「地域住民が、自らの生活環境の向上のために自主的に活動し、相互の交流を深めることのできる施設」として昭和四十八年に最初の二館がオープンしている。

しかし、私たちがテーマに選んだ当時（昭和五十四年）、地区センターの利用者の実態は、少項目の統計資料と職員の見聞のほかは、ほとんど明らかにならなかった。そこで、地区センター利用者調査では、利用圏や利用形態をまず明らかにした上で利用者のタイプや地区センター観、住民意識などを分析して、地区センターの全体像と将来像に迫ってみようとした。

私たちには、住民相互の関係、住民と行政との関係について考えてみたい気持ちがあったから、市民のために生まれた地区センターの理念と実態を調べること、私たちなりのコミュニケーション像、コミュニケーションのあり方が得られるのではないかと期待した。さらに、研究テーマ

として他に提案された「自治会・町内会」や「文化行政」などの問題意識を尊重して、住民自治・市民参加と地区センター、文化活動の場としての地区センターという視点も取り入れて研究を進めていった。

しかし、地区センターを中心とした問題設定を共有できなかった人たちは、残念ながらこの研究会から離れていった。

### 試行錯誤期

一年で完成させる予定だった事前勉強会——実査——分析——報告書。ところが「木を見て森を見ない」ような迷路に迷い込んで批判され、議論を延々と重ねていくことになった。テーマ設定から実査まで一年余、分析に一年半、さらに報告書作成まで一年半近く。メンバーが少数に固定化していく一方で先輩の「都市問題を考える会」と合併。報告書の作成でだいぶもたついてきたが、職員研修所の協力を得て、ようやく「地区センターからの発想」として印刷原稿までこぎつけたところである。さて、私たちの調査はすべて手づくり行われたこと、報告書は個人による分析の集合だということ、が特徴。調査票のワーディングやアウトプットの読み取りはもちろん、タイプ、オフセット印刷、製本まで自分たちの手で試行

錯誤しながら行ってきた。手間と時間がかかり、エネルギーの莫大なる浪費であるという強い批判も出ているが、私は手作業も一つの技術なので軽視すべきではないと思っている。

分析の段階では、私たちの自分なりの角度から調査結果に切り込んでいった。分類すると、①利用の実態——調査結果を詳細に読み取ったもの②各自がテーマを設定し調査結果を分析したもの（「市民参加」や「認知の過程」など、仮説の検証など）③調査対象者を階層（主婦、高校生、老人）別に抽出して、地域や地区センターでの役割を論じたもの④その他、提言や感想。

このころ、各分析論文ごとに深夜に及ぶ激論をたたかわした。それを通じて「利用圏の二重性」等の利用実態や利用者の市民意識などについて共通認識をもつことができたが、「実験の場としての地区センター」や「市民自治とは」など大きな問題のいくつかは、グループとしての考え方を統一することができなかった。ただし、現在の地区センターは考えうる機能のすべては生かしてなく、市民も行政ももっと地区センターを使いこなすべきだという点はメンバー共通の結論である。このようにしてまとめられた各論文が一つに組み合わされて報告書となった。

### 同時期の自主研究会

ところで私たちはこの四年間「地区センター調査グループ」だけで活動してきたわけではない。メンバーが参加している他の研究会をいくつか紹介したい。

【まちづくり研究会（まち研）国際部】自治体若手職員レベルでの国際交流を実践しようとしているグループ。一九八二年YLPの事前勉強会としてスタートし、その年暮から独立した歩みをはじめた。留学生とのパーティの企画、国内外の講師を招いての講演会など。私自身を含め若手職員が、専門分野にこだわらず、横浜の外の世界、世界からみた横浜を理解していくことを期待している。

【まちづくり研究会（まち研）まち研国際部の母体。かつて「まちづくり」のテーマで研修を受けた人たちが、研修終了後もこのような問題を考えていこうと広く呼びかけてできたグループ。取りあげる内容は企画・都市計画関係の内容が多いものの、ソフトな分野からの発表もあり、広く多彩である。

【よこはまかわを考える会】川をテーマとして、勉強だけでなく実地見学やイベントも行うユニークな研究会。昨年一月、川に関する運動体としてスタート。メンバーには市職員のほか、川に関心のある市民も参加している。

昨年夏、屋形船での川くんだり、秋には

カヌー大会を開催。汚れきった都会の川がなお生きた水辺であることを多くの市民に気づかせた。今年三月末には、今まで裏のドブ川だった大岡川をまちの表の顔に変えていくための第一歩「大岡川グリーンフェスティバル」を、まちづくりの一環として上大岡再開発協議会と共催で行う予定である。

【港北を知る会】かつて港北区役所で地区カルテを作成したプロジェクトのメンバーが異動で抜けていくため、いつでも再プロジェクトを組めるよう、港北についてよく知ることを目的に、昨年から動き始めた。地域のことを知ろう（大倉山商店街）、地域を歩こう（熊野神社と市民の森）、大型事業をとりあげよう（市民とMM21）など広くテーマを選び、区民や専門家にも講師を依頼している。他の区でもこのような研究会があるかもしれないが、区の職員しかできないような成果が望まれる。

このような各種の研究会に参加し新たな情報や考え方をえては、私たちは地区センター調査に戻っていったわけである。これらの研究会との違いを大ざっぱにいえば、「まち研」などが大人数の発表の場であるのに対し「地区センター調査グループ」は少人数での議論の場であるということだろうか。そして、同期で一緒に「成長」してきた人が多く本音を

言いやすい。少人数なのでいろいろと融通がききやすいということもできる。

### 市政への参加・市民との連携

少し前、次のような批判を受けた。「なぜ、担当部局と話し合っていないのか」区センターを実現させていかないのか」と。私たちが労力をかけた調査結果は、確かに何かの形で行政にフィードバックさせるべきである。

担当課との協議はむろん必要であるが、さらに文化行政・社会教育担当者、地区センターの現場、利用者たちに報告書を読んで、検討し批判してもらいたい。一部の地区センターでは私たちの調査結果が運営に多少生かされたが、地区センターが関係者の共通の問題となることを期待する。この意味で、自主研究の成果と市政とが結びつくよう努力しなければならぬ。

ところで、まちづくりでも福祉でも広報でも、市民との協同作業を前提にしないと十分な効果はあがらない。自主研究の成果を市政に生かす場合も同じである。

自主研究会は業務から離れた自由な立場にあるから、企業・団体・個人を問わず、庁外の人との連携が簡単にできる。「かわを考える会」や「港北を知る会」などのほか、この方向を目指している研

究会が多いようだ。

私たち「地区センター調査グループ」の今後にもこの方向は欠かせない。調査だけでは自己満足に終わってしまいそうである。

### 脱皮と再生

他のメンバーに引ばつてもらってきた私がかんことを書くのはおかしいかもれないが、グループの軌跡を反省してみよう。私たちが調査票や個人論文を作る時に論議したことが、その後のグループ活動にどう生かされているのだろうか？

## 福祉現場での自主研究

田中文夫

### はじめに

「自主研究」は、社会福祉職にとつては、日常実践を通じての自己陶冶に不可欠であるが、さらに、専門性向上についての社会的要請にこたえる方法でもある。

横浜市は、社会福祉職制度を導入した当時は、専門的知識と熱意をもった者を採用すれば、自発的に「自主研究」に取り組むであろうし、現場も活性化し、サービスの充実がはかれるであろう、と考えていたようである。

ところが、「自主研究」はいっこうに活発化せず、従来より活動していた「横

個人ではともかく、グループとしては一年前、二年前の論議からあまり発展していないと思う。

地区センターをテーマに選んでからまる四年、市を巡る情勢もメンバー個人の生活も変化している。自治体職員として常に積極的に問題意識をもち続けるため、前に述べた課題を解決する姿勢をもって、私たちは地区センターに留まることなく新たな問題をさぐって先へ進んでいきたい。

〈都市計画局開発課都市整備調査等担当〉

浜福祉研究・月曜会」も停滞化していく中で、いわゆる専門職に値する必須条件である「自主研究」は現場に定着することができなかったのである。

これには、さまざまな理由が考えられるであろうが、基本的には、社会福祉のニーズの複雑化（多様化・高度化）と量的拡大に対して、有効な対応策ももたえぬまま、煩瑣と多忙にとりまぎれて、自主的研究活動を展開するに足る活力を生み出せなかったことが原因であろう。

今日でも、現場のおかれた状況は、混乱の度を深めたといえ、基本的な変